



フェアリーピンの空の下で

〈東京都〉 平田 初枝 ひらた はつえ 70歳

30代のころ、フェアリーピンのボルネオ島に近い小さな島の病院に私はいた。水は雨水、電気もない。給食もなく、みんなが寄り添い分かち合いながら過ごしていた。そんなある日、病院の裏の部落が襲撃された。2日間、静寂が立ち込めた。

病院スタッフが、部落のある家で家族全員の遺体の傍らで、小刻みに震える毛布を発見し、病院に運び込んで来た。20代と思われる青年は、3人の子ども、妻、両親を失い、言葉が話せなくなっていた。大腿部には銃の貫通痕があり、化膿していた。私は受け持ちになり、彼の世話を行った。

とはいつても、私は彼の言語を話せず、彼は自分の思いを訴える言葉

を失くしていた。何を思っているのか、病室の天井をながめ、窓から見える青い海を見つめていた。彼の表情は硬く、彼の心の中に誰も踏み込むことを許さないような氷の壁を感じた。私は毎日、傷からはい出るうじ虫を取り除き、消毒をして包帯をした。そして、ココナッツを割り、そこから取れるオイルを足につけてマッサージを行った。

心して笑顔を作りながら、「おはよう!」と声を掛け、体を拭いた。足の傷だけでなく心の傷も癒したいと願いながら、慰める言葉も励ます言葉もない私。毎日マッサージを続けた。ひと月以上ベッドでの生活が続いたこともあり、立つこともできなくなっていた。お互いに語り合う

こともない日々が続いていたある日、私は急に日本に帰らなければならなくなり、後ろ髪を引かれる思いで島を離れた。

それから1年、久しぶりに島に戻った私の前に、つえを突いた背の高い青年が歩いてやって来た。ちよっぴり恥ずかしそうに、はにかむその人が、あの彼だと認識したとき、私の心は熱いものでいっぱいになった。お互いに手を握り、ただただ笑顔でうなずくだけだった。

言葉にならない喜びと感謝があふれたひととき、あれから30年がたった今でも、思い出すだけで、看護師をしていて良かったと感じられる若き日の体験。フェアリーピンの青い空がそこにはあった。